

アジアを 読む

17

インド洋津波— 海のシルクロードと紛争と

「海のシルクロード」と「紛争地域」——インド洋沿岸諸国を襲った大津波の報道をみて、真っ先に浮かんだのはこの言葉である。

被災地域はいにしえの「海のシルクロード」だった。深刻な打撃を受けたスマトラ島北部のインドネシアのアチェ特別州。中国福建省の泉州からホルムズ（現イラン領）まで海路をたどったマルコ・ポーロは「東方見聞録」でアチェにも触れている。

それ以前の中国唐時代は、スマトラ島はスリウィジャヤ王国が支配する仏教王国だった。唐の仏教僧の義浄がインドへの修行の途中にこの王国に滞在した記録が残る。1000

人以上の仏僧がいたといわれるパレンバンは中国僧が梵語を身につけ、聖地インドへと渡る拠点でもあったようだ。

明の時代、イスラム教徒の鄭和は7回もの大航海を果たし、その足跡はスマトラ島、マラッカ、タイ、スリランカ、モルジブ、インド、アラビア半島、東アフリカまで及ぶ。スリランカには鄭和が建立した碑文が今も残る。8世紀から15世紀初頭にかけては、泉州、広州（広東省）からマラッカ海峡を経てインド洋、ペルシャ湾に至る海のネットワークが形成された「海洋中国」の時代だった。

鄭和の航路は大津波被災地と見事に

重なる。まさに一衣帯水である。

近現代に入り、この一衣帯水の地の多くは先進社会から関心を寄せられない「停滞」の地帯となった。原因の一つは紛争である。アチェでは16世紀に「アチェ王国」が興り、20世紀初頭まで王国を維持した。アチェ人は敬虔なイスラム教徒で勇敢なことも知られる。19世紀後半には、スマトラでの権益拡大を狙うオランダと30年にもわたり戦った。最終的にはオランダの支配下に入ったが、独立の気風は受け継がれた。

インドネシア独立後もアチェは北スマトラ州への併合に反発し、独自に独立を宣言するなど中央政府と対峙してきた。「アチェ特別州」という地名には誇り高いアチェの歴史が込められている。そして現在もアチェ独立を唱える「自由アチェ運動」(GAM)が、インドネシア国軍とゲリラ戦を繰り返している。アチェを説明する時、「戒厳令」「非常事態宣言」といった言葉は切り離せない。

スリランカでは独立後、多数を占めるシンハラ人（仏教徒主体）と少数派のタミル人（ヒンズー教徒主体）との民族紛争が続く。タミル人主体

の分離国家の樹立をめざす武装組織「タミル・イーラム解放の虎」(LTTE)と政府軍との停戦は何とか維持されているが、対立を溶く道筋はみえない。直接的な被災地ではないが、イスラム教徒の多いタイ南部も不安定さを増している。

災害後、こうした紛争地に各国の関係者が訪れ、救済のために非政府組織が多く入り込んだことは紛争の行方にも影響するのだろうか。未曾有の災害のなかで唯一の光明が見いだせるのは、「停滞」の地域に世界の目が注がれたことである。インドネシア政府は救援活動のためにアチェの州非常事態宣言を緩和し、スリランカでは分離独立派のLTTEが被災者に救援物資を配っている。一方で、混乱に乗じて影響力を強めようとする紛争当事者の動きもみえる。宿命ともいえる紛争や対立はもろん簡単には水解しないだろう。ただ、宗教、人種を問わず世界から多くの民間義捐金や救援物資が被災地に送られている。こうした世界からの支援に、復興後に紛争で応えるのだろうか。

（日経香港社 奥村幸広）